



第7537号

2022年6月9日(木)

## 草木から色が出るように

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

### ◆ちまたにあふれる言葉

参議院選挙が近づいてきた。選挙戦中は各候補者から何となく耳に心地よい言葉が大量に発せられることだろう。

政治家の言葉に限ったことではないが、ちまたにあふれる言葉に接するとき、その意味するところは理解できても、何だか空々しく聞こえたり、違和感を覚えたりすることがある。例えば、よく使われる「寄り添う」「思いを受け止める」「共に歩む」などは、一見、共感性の高い言葉のようだが、実感、実態が伴っていないと「上から目線」の言い方だと感じてしまう。

少し前のことになるが、国指定伝統的工芸品・信州紬(つむぎ)の一つである「上田紬」の染織作家・小山憲市さんの話を聞く機会があった。この時の話を時折、思い返している。

### ◆一期一会の色

筆者が特に印象に残ったのは、糸を染める工程だ。草木染めとは、紅花や藍のように花や葉を使って染めることだと早合点していたが、花や葉だけではなく、梅は枝、茜は根、クルミは果皮、栗はイガ…と植物によって使う部分は違うようだ。色素が濃く出る部分が植物によって違うということだろう。また、同じ植物でも個体や季節によって出る色が違い、同じ方法で作っても同じ色には二度と出会えない。

さらに、この天然の染液を鉄分と結合させる媒染を経て色が定着するのだが、鉄や銅、アルミ、錫(スズ)など、何と掛け合わせるかで引き出される色が変わり、無限の色が生まれるのだという。途方もない手間暇と自然の力で生み出される一期一会の色。一定した色を大量に作ることのできる化学染料と何という違いか。

### ◆内から湧き出る言葉

この草木から出る色を、人が発する言葉と考えてみたらどうだろう。

常に表に出している言葉も大切だが、樹皮や根から内に秘めた色が出るように、その人の普段は見えない、深い部分から湧き出てくる言葉もあるはずだ。借り物ではない、人間性や本質を表す、意味のこもった言葉であり、その日、その時の自分を最も表わす言葉だと言えよう。

そして、それを受け取る相手を鉄や銅などの媒染素材に置き換えてみるとしよう。その言葉をどのように受け取り、反応するかで、最終的に定着する色は変わってくる。言葉を受け取った側の力も加わって、より鮮やかに、あるいは、より澄んだ色になるのか、それとも全く思いも寄らない色が新たに生まれるのか、くすんでしまうのか。

発する側が自分本来の言葉を用いるとともに、受け取る側がそれをどう感じ、動くかで展開は変わってくる。ここまで草木染めになぞらえてコミュニケーションの話をしてきたつもりだが、言葉に注意深く耳を傾けて、行動するという姿勢は、政治との関わりにも言えることかもしれない。化学染料のような代わり映えがしない大量消費の言葉は、何度聞かされても心に響かず、受け取りようがない。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003